

新刊 Book reviews

□みねはな会（谷亀高広・西山昌代・森和男編著）：**山野草・栽培全書～日本・アジアの山野草篇～** A4. 271 pp. ¥2,730. 近代出版. ISBN 978-4-905777-16-8 C9461.

わが国の数ある山野草同好会の中で、独自の文化を維持する「みねはな会」の創立 50 周年記念出版であるが、創立会員でかつ会の中心人物であった谷村忠訓氏が亡くなられたため、同氏を記念する出版物ともなった。全頁カラー写真満載。栽培の基礎知識に始まり、単子葉植物 32 項目、双子葉植物 78 項目、さらにこだわりの山野草として、シダ、カンアオイ、水生植物、ツツジ・シャクナゲなど 11 項目が、それぞれのベテランによって記述されている。山草の栽培法は一人一人が苦心して開拓したもので、それらが一まとめに見られるのだから、こんな便利なものはないし、普通ではなかなかお目にかかれない花々が、一冊で見られて楽しい。

山草栽培のための採取は、貴重植物減少の一因として白い目で見られるが、栽培家は「栽培法が分からなければ、減少した山草を復活させる目処が立たない」と主張する。絶滅危惧種の図鑑を作るときには、だれも知らないはずの生育地やその開花状況を、写真家独自のネットワークで知らせ合うという。一方、里見信生氏の追悼記には、貴重植物の産地に「研究者」を案内する際、わざと路を間違えて、地点の特定をさせにくくする、という記事もある。白山では、元来ごく狭い高山帯が、来るべき温暖化の結果失われることを危惧して、栽培家の指導の下に、そこに産する全植物を種子（散布体）から育てる先見的な事業が進められている。また、夏のスキー場の有効利用のために、「お花畑」を演出する事例も目につくようになった。こういう事業には、栽培家のノウハウは欠かせない。

他方、栽培家も写真家も観察会も、以前あった所に行ってみたら数が減っていたと、しばしばこぼす。車で走っていて「山草あります」という札に出会うと、「品種選別が終わって不要になった月並み株を処分しているのか」と、勘ぐってしまう。いずれにせよ、情報は善意の人ばかりに伝わるのではない、ということを感じる。

「栽培困難な植物について」という見出しの下に、ギンリョウソウ、ツチアケビ、キンランなど

の菌従属栄養植物の生理を解説し、これらの植物を掘りとりて栽培しようとする無謀さを説くコラムもある。そう言えば我が家の近くの浅間山では、最近キンランやギンラン、オオバノトンボソウなどが、急に現れるようになった。ここは都立武蔵野公園の一角なので、公園事務所が世話をしているらしい。こういう植物は昔、と言っても私の子供時代の 1940 年代には、あっても不思議はなかったのだが、ここは戦時中に調布飛行場の対空監視哨が設けられて、軍隊が常駐し、山の下には防空壕のトンネルが縦横に掘られていた。敗戦後のなりゆきで、はげ山から現在のコナラ林になったところなので、そう簡単にこれらの植物が復活するとは思えない。ヤマユリも 15 年くらい前から花を見るようになったのだが、はじめのうちはただ真っ白なカサ・プランカだった。近頃になってようやく花冠に茶色の点々のある株に「進化」したのだが、果実を見たことはないのに、株数がやたらに多くなったのが気になる。公園の花壇のような「擬似自然」の感覚だ。キンランやオオバノトンボソウや果てはムサシノキスゲまでも、栽培品や山採りのものが種苗商を介して持ち込まれているのではないだろうか。キジョランはここ数年で目につくようになったが、これは 20 km ほど西の高尾山に多生するので、風や鳥に運ばれて来たとしてもおかしくあるまい。

本書が山草の栽培技術の普及に貢献することは疑いないが、ベテラン諸氏の慎重な指導を期待する。（金井弘夫）

□樋口正信：**コケのふしぎ**。新書版。215 pp. 2013. ¥1,100+ 税。ソフトバンククリエイティブ（株）。ISBN 978-4-7973-5931-2 C0245.

顕花植物の派手さにくらべて、コケはどこにでもあるのに、背景そのもののようになびかれて気付かれず、せいぜい「コケが生えている」で見過ぎられることが多い。

本書は一般向けに、コケの魅力を紹介することが目的とのことで、コケとはどういう生き物か；コケの生き方；日本の代表的なコケ；コケを科学する；コケとヒト；コケとつきあう；さらにコケを知るために、の 7 章より成る。

ほとんどすべてのページに景観、個体、生殖器官、組織の顕微鏡像などのカラー写真が載せてあり、著者がコケの魅力を読者にアピールしようという熱意が感じられる。ただし、線画を使った

説明図があったら、初心者に分かりやすいのに、と思うケースもある。私が教えに行っている専門学校は自然系なのだが、組織や細胞の構造を単語として知ってはいても、実物について理解している者はほとんどいない。コケというものを認識させるためには、スマートさを少々削ってでも、ところどころにそういう基本的な説明を挟んだ方がよいと思う。そうでないと、折角の写真が見過ごされてしまうおそれがある。

写真の面積は本書の約60%を占める。だが紙質のせいだろうか、私の視力が衰えたせいだろうか（こちらの方が可能性が高い）、裸眼でも眼鏡をかけても、なんとなくぼやけた感じがする。こういうときにはルーペを使うのだが、拡大はできても網点が強調されて、目的を達しない。何の気なしに天眼鏡で覗いてみたら、網点なしのとてもシャープな映像が見えてびっくりした。易者が使うような柄つきの単レンズで、焦点距離は20 cmと23 cmの二つを試みた。新聞の写真を天眼鏡でのぞいてみたら、これも網点なしで拡大されて見えた。他の印刷物でも同様だった。ここで言うルーペは、学校理科の解剖セットについている二枚組み合わせのごく普通のものだが、一枚ずつでのぞいても網点が見えてしまう。焦点距離は9 cmと6.5 cmだった。視力が健全な人なら、こんなことをしなくてもシッカリ見えるのだろう。一般向けどころか、植物ばかりでなく生物の他分野を専攻する人達にとっても、きわめて有用な一冊である。（金井弘夫）

□原島広至（著）、伊藤美千穂・北山 隆（監）：**生薬単**。A5. xxxii+344+21 pp. ¥3,800+税。（株）エヌ・ティー・エス。ISBN 978-4-86043-398-7 C3547。

むかし受験参考書の出版社が作った単語集が、「豆単」という名で人気を呼んだことがある。私は実見していないが、本書の「単」はそういう意味だろうと推測した。「単」という文字になにか特別な意味があるかと辞書をのぞいたが、なさそうだった。国家試験の参考書と思えばよいのだが、本の副題に「語源から覚える植物学・生薬学単語集」、英文表題は“Word Book of Botanical Terms and Latin Names with Etymological Memory Aids—Pharmacognosy—”とあるから、著者の関心がこちらの方にあることが察せられる。初版は

2007年、薬局法の改訂に対応して2012年に改訂第二版が刊行された。

凡例にあたる『「生薬単」の特徴』では、本書が見開き2頁に一点の生薬を当ててあることを示す。左頁には、まず基源植物の学名とその読みおよび和名が示され、薬剤師国家試験での出題頻度がミシュラン風に星の数で示される。学名には古典ラテン語と英語の発音が片仮名で示されている。これに続いて基源植物の写真と簡単な説明、生薬の使用部位と生薬としての形態のカラー写真、薬効、漢方処方名、主要成分、構造式、立体モデルが示される。立体モデルは官能基を色分けしたうえ、読者が見易い姿勢に置いたもので、予備知識さえあれば、これから色々なヒントを得られるのだろう。序文に示されたモデルのグリチルリシンはカンゾウの主成分だが、カンゾウは用途の広い生薬で記事が多く、該当頁に収まり切れなかったのも、序文に例示することにしたとのこと。

右頁はワンポイント解説として、学名の語源、そのラテン語、ギリシャ語、英語の意味や読み方、発音、関連単語のみならず、話のおもむくままにアラビア語、ペルシャ語、イタリア語、中国語、日本語その他の言語の語源や発音や文字までが示されている。これに加えて、生薬コラムと名付けた欄には、それらに関するあらゆる雑学が披露される。たとえば「狂言『附子（ぶす）』とトリカブト」、「ロート根とシーボルト事件」、「ドクダミ科とトカゲ、恐竜とアジ」、「スオウとブラジリンとブラジル」という具合である。どんなにたくさん話題があっても2ページに押し込んでしまうためか、文字は頁によって大きかったり小さかったりする。一番小さい文字は、数字1字が0.5 mmだった。どの見開き頁にも、本書で扱う生薬和名144件が最下縁に50音順に配列され、その出現頁が示されると共に、現に見ている頁の生薬名が黄色でマークされている。

目次は基源別、部位別のほかにコラム目次があるが、コラムの話題が分別不能のようで、これだけは「～別」がつかず、ただ頁順に並べてある。

生薬に関わりのない人が右頁だけ読んでも、値段が高いとは思わないだろう。同じ出版社から、ツボ単、骨単、肉単、脳単、臓単のほか、3D踊る肉単（CDつき）が刊行されているが、書店でチラとのぞいたところでは、本書の趣向とはかなり異なったものだった。（金井弘夫）

□山本紀夫：ジャガイモとインカ帝国. A5. 335+vii pp. 2004. ¥4,200+ 税. 東京大学出版会. ISBN 4-13-063320-1 C1040.

従来、南アメリカのアンデス古代文明は、中米のメソアメリカ文明と共に、トウモロコシを主要農作物とする生活に基づいて発達したものとされ、わが国の教科書でも、例外なくその立場を踏襲しているとのこと。

著者はアンデス地域でのたび重なる現地調査の結果、インカ帝国の中心であったチチカカ湖周辺の大都市をはじめ、その末裔であるインディオの生活圏が、トウモロコシの栽培圏よりも高度がはるかに高いことに注目した。そこでの彼らの生活は、非常に多くの種類のジャガイモ類をはじめとするイモ類（根菜）と、畑作ができないほどの乾燥高原でのリャマやアルパカの放牧によって支えられている。

日常の主食はイモ類で、特にジャガイモは種類が多く、毒性の強いジャガイモ類でも、毒抜きをしたり毒消しに役立つ土と共に食べたり、乾燥貯蔵したりしている。

トウモロコシは生活圏からはるかに下だった畑

で出作り栽培してはいるが、用途は酒造りで、主食としての役割はない。酒は祭事に当たって必ず出されるが、「惜しみなく」供されねばならないという儀礼上のしきたりがあり、これはメソアメリカ文明と同様である。

インカを征服したスペイン人は、「芋」というものになじみが薄く、松露のようなキノコの仲間として記録している一方、トウモロコシは既知のものだったし、メソアメリカ文化ではトウモロコシが象徴的に扱われていることもあって、インカもトウモロコシ中心の文化として記録されたのだろうと、著者は推察している。そしてアンデスのインカ文明は、ジャガイモ類栽培とラクダ類の放牧によって成り立ったものだと考えるに至った。

もう一つの特色は階段耕地で、絶壁のような急傾斜地に、石を丁寧に組んだ幅の狭い耕地が上から下まで造られていて、それらを潤す水路もまた石造りの立派なものであるという。ヒマラヤの段々畑とは比較にならない、高度な技術を持つ文化であったことがわかる。丹念な現地調査の結果、通説を覆すに至った労作である。（金井弘夫）